
魔女と僕と魔女

太陽サン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と僕と魔女

【Nコード】

N4265BA

【作者名】

太陽サン

【あらすじ】

東京の真ん中、大都会にある塔で少年が魔女を目指す話です。

魔女への一歩

東京、大都会の上空で僕は落ちた。

飛行船から都会のビル群へ。誰かに落とされた気もするが忘れた。そんなことより僕にとって、人生を決める大切なことがおきた。

『ガシっ』

上空で落ちる、僕の手を誰かがとった。

それは、大きな白い翼を生やした人。

夕焼けに映るその白い美しい姿はまるで。

「天使……」

僕はそうつぶやいた。

「ぶーぶーはずれ！あたしは魔女だよ。」

彼女は陽気に、笑いながらそう言った。

僕はあのととき、あの瞬間決めたんだ。

魔女になるって。

彼女のような魔女に。

10年後

2017年東京

大都会東京の、ど真ん中に大きな塔があった。

それは、全長一万メートルの窓もないの飾りっ気もない殺風景な塔であった。

50年前まで、大東京タワーと呼ばれていたその場所だ。

その高い高い塔の足元に、一人の少年は立っていた。

塔を見上げるようにして、少年は塔を見て感動しているようだった。

「俺はここで・・・魔女になってみせる。」
そう静かに力強く、少年はつぶやいた。

50年前までこの一万メートルの窓もない飾りっ気もない殺風景な塔の、巨大な塔の扉が開かれた。

それは歴史上初めてのことである。

いや、人間の歴史上初めてのことである。

人間が存在する前の歴史には、この塔の扉は開いていたのかもしれない。

ようは、この塔は人間が存在する前からあったモノなのである。

それは、歴史上のあらゆる文献と。それを研究した歴史家によって証明されている。

『死の塔』

『まやかしの塔』

『神の塔』

『大東京タワー』

さまざまな時代で、さまざまな呼ばれ方してきた。そしていまの名称は、魔女学校。

魔女を育成するための、専門機関である。

この塔が、魔女学校と呼ばれるようになった経緯は、この塔の扉が初めて開いた50年前にさかのぼる。

それまで、この塔は不可侵にして絶対硬度を誇り、扉を開けることも塔を破壊することもできなかった。

そして、東京のド真ん中に。絶対的な塔として君臨していた。

だがある日、その塔の扉が開いたのだ。音もなく予兆もなくただ平然と、全長300メートルの塔の扉がひとりで。

戦後日本は、疲弊していた。

だがその話題は日本中。いや世界中をを駆け巡り、観光の目玉として連日数百万単位の観光客が、塔のまわりに押し寄せていた。

だが、誰も扉の奥に誰も入らなかった、いや入れなかったのだ。

扉がまた閉まったのではない。扉が開いているのに入れなかったのだ。

まるで扉が開いた場所に、もう一枚の见えない分厚い扉が存在するかのよう。

その见えない扉も不可侵にして破壊することもできなかった。

见えないのだから、当然のことだが。

そして、人々は、塔への侵入あきらめ。興味も徐々に薄れていった。そして、それから半年がたち。

この塔の扉が、開いているのがめずらしくもなく、あたりまえで见なれた光景になった頃。扉にある言葉が映しだされた。

それは、以前の開かずの扉ではなく、いま存在しているが、存在するはずのない、见えない扉のほうにである。

その文字は、宙に浮くように、白く発光して映しだされていた。

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。』

この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

それ以来ここは、魔女学校と呼ばれた。

そして時は流れ。2017年東京。

現在、魔女学校は、通称魔女学と呼ばれ。この世界にもっとも重要な場所として存在していた。そして、この全長1万メートルの、塔の足元に、一人の少年はいた。少年は、塔にあることをしていた。

「んーんー！」

はるか50年以上前に、人々がしていたことだ。

「んはーーー」

それは、閉まっている塔の扉を。

「んばーーー」

無理やり開けよとすることだ。

少年は力いっぱい、全長300メートルの扉を、無理やりこじ開けようとしていた。

「んがーーーーー!!」

少年は、120%の力を込めた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ダメだった。

「はあはあやっぱり開かない・・・俺には魔力はあるはずなのに・・・
変だなあゝ噂では、魔力があれば開けられるはずなのに。」
ふいに後ろから。

「それは、違うわ」

「!」

声をかけられた。女性の声だ。振りかえるとそこには。

真面目でやさしそうな少女と、おとなしくどこか気弱そうな、二人の少女が立っていた。

(めずらしい制服だ。どこかでみたことがある・・・たしか・・・
なにのかパンフレットで見たような・・・そうか!魔女学の制服
!といことは、このふたりはこの生徒で魔女見習い?)

真面目でやさしそうな少女は、俺の目のまで歩いてくると、そこそこ膨らみ

のある胸に手をおき、自己紹介をしてきた。

「樹よ、かんばら神原 いつき樹、そしてこの子はあいはらりん藍原凛、樹達はここの生徒なの、
あなたは誰?どうして扉を開けようとしたの?」

すこし答えるのを迷ったが、すぐに答えた。

「お・俺は黒羊 祭です。開けようとしていた理由は・・・」

「黒羊!」

急に、樹さんが驚いた顔をした。

「あの・・・どうしたんですか?」

樹と名乗る少女は、あきらかに少し動揺していたが。すぐに、平静を取り戻し。

「ううん・・・ごめんなさい。なんでもないわ、ちょっと知っている

苗字だったから。」

「そうですか？」

「それで？あなたは どうしてこの扉をあけたいのかな？興味本意かな・・・」

それとも力試し？もしかして不法侵入が目的かしら、ふふ」

「違います！俺は魔女になりたいんです！」

俺は堂々とキツパリ答えた、いつもどおり。

「魔女に？」

「はい！」

俺は、バカにされることを覚悟した。当然だろう？

男が魔女を指指そうとしているのだ、それは仕方ないことだ。

傷つくが、俺はその、悔しさをバネに、余計にその夢を叶えるため努力した。

（たしかに、世間から見れば、馬鹿なことなのかもしれない・・・でも、きっと、叶えた時に誰もが、認めてくれるとそう信じている。）

現に、一人いてくれたのだから。

俺を育ててくれた、ばっちゃんは。

「嘘をつきなさい。そうしないと友達ができないわよ」

そう言った。

実際、友達はいままで一人しかできなかった。

それでも、そのたった一人の友達は、理解してくれた。認めてくれた。

俺に、きつとなれると言ってくれた。

それは、俺にとってなによりも救いになっている。

自分の夢を言葉だけでも、捻じ曲げれば、きっと傷つかずもっと友達できたかもしれない。

そうかもしれない。その通りだ。

それが正しい選択なのかもしれない。

だが、俺は曲げたくなかった。

夢だけは。

俺の信じた夢を、友達が信じてくれた夢を、ごまかしたくなかったから。

それにもし、ばっちゃんが言うように、魔女を目指すという夢を、誰に語らず秘密の夢としていたら、あのかけがいのない友人はできなかったかもしれない。それは絶対やだ。

この真面目で、やさしそうな神原樹さんは、どう思うのだろう。

後ろの藍原凜さんは、びっくりした顔をしてる、たぶんあまりいい感情をもたれていないだろう。

自分勝手な考えかもしれないけど、俺はこの学校で魔女を目指すうえで、一人くらい俺の夢を理解してくれる友人がほしかった。友人ではなくても奇異の目でみないそんな人を

「そっか祭君・・男の子がなのに魔女になりたいのかー」

「はい変ですか？」

「いいえ、変じゃないわ。がんばって！男の子とか関係ない・・夢を信じればきつとなれるわ。」

そう言って彼女は、やさしくほほ笑んだ。

嬉しかった、バカな夢かもしれない。でも大切な夢を、彼女は応援してくるとまで言ってくれた。涙が目に溜まるほど、うれしかった。

二人目が現れたのだ。

「ありがとうございます！」

俺は嬉しさのあまり、全力でお辞儀した。

「えっ？・・・あっ・・・はい・・・」

彼女はすこし困惑した顔で、俺からの一方的な、うれしさをその身に受けた。

一話2

そして彼女は、少し考えるような姿勢をとると、一言。

「しってるかな？」

「え？何をですか？」

「この言葉を・・・」

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。

この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

「それはたしか50年前の・・・」

「そうよ、50年前に、この扉を開けたあとにある見えない扉に書かれていた一文よ。」

「たしか、それから数カ月後ですよ？ここが魔女学校と呼ばれるようになったのは？」

「そう・・・初めはこの扉は、常時開きっぱなしになっていたらしいの。そして魔力を持ち、塔の中に入る者すべてに、魔法を教えていたらしいわ。」

『スっ』

つと樹さんは、俺の頬に両手に手をあて、目をつぶった。

（まさかキス！！）

すると、隣にいた藍原さんが慌てて言う。

「キスじゃないからね！樹ちゃんは、あなたに魔力があるかどうか、探っているだけだからね！勘違いしないでね！」

隣にいる藍原さんにすごい剣幕で怒られた。

ものすごい敵愾心むき出しで言われた。

（すいません、勘違いしてました。）

「感じるわ、あなたから・・・」

「えっ！」

「魔力を……」

「嘘、そんな……男の人は魔力を持ってないはず。ありえないよ」

俺はそのまま、魔力があることに、なにも疑問もなく生きていたから、男が魔力をもっているのがそんなめずらしいことだとは思わなかった。

（男が持っているのは、そんなにありえないことなのか？）

うん！これであなたにはこの塔に入れる条件を満たしていることがわかったわ

あなたには魔女になれる資格があるわ」

「でも男だよ……樹ちゃん」

男とか女とか関係ないわ。

「でも……他の人がなんていうか。」

目を伏せながら藍原さんがそう言う。

「凜、あなたは他人の目を気にしすぎよ」

「……わ……わたしは……」

やさしい口調で。

「人はね、誰かのために生きてるんじゃない、自分のために生きているの。だから、他人がどうか関係ない、自分がどうかなのよ……」

でも人は、一人では生きていけない。だから樹たちは友達なの……」

「樹ちゃん……」

強い口調で。

「でも一人で乗り越えなくちゃいけないこともある。でも一人じゃない……」

あなたがもし、その自分の殻を出たいときは、相談して……。一人で抱えないで。

悩みが違ふ以上、一緒に乗りこえることはできないわ……。でも乗り越える手助けくらいはできる……。だって私たち一生の友達でしょ？」

「うん・うん・うん・ありがとう樹ちゃん・」

涙に顔を濡らしながら、藍原さんはうなづく。

「あんたのためなら、どんなことでもするわ。」

そう彼女を抱きかかえながら、頭を撫でてあげている。

そしてこちらを見て。

「あなたもよ、祭くん。もしなにかあったら、樹に相談して。

なんでもものるわよ、もしあなたに、魔女になる資格がないという人がいれば、樹がその人にわからせてあげる。もちろん力すくじやないわよ、ふふ、言葉でね。」

うれしかった、自分のことをわかって認めてくれた。

いままでこんなに認めてくれたのは、2年前に別れた幼馴染くらいだ。

樹さんはまごうことなき、正義の味方気質だ。

この人は、たぶん誰にでもやさしいのだろう。誰にでも味方するのだろう。

きっと悪にさえ。

この人は、どんな悪にも、罪を憎んで人を憎まずを体現するだろう。どんな悪だろうと許し。

助けを求められれば、時と場合によっては助ける。

正真正銘の正義の味方。

かつて、漫画やアニメであこがれた、あのヒーローを彷彿させる。

「樹さんってなんか、正義の味方みたいですね？」

樹さんは驚いて顔で

「え？正義の味方？どうしてそう思うの？」

「えっと・・・あの？なにか気を悪くしましたか？」

俺は、心配になり尋ねる。

「いや・・・あははちよっと・・・じゃなくて、かなり嬉しくて・・・」

「うれしい？」

「実はね・・・樹の夢は、正義の味方になることなの!」

「え!」

「この夢はね、人にあまり理解されないの・・・子供っぽいとか、かっこつけとかよく言われるわ。そんなことは気にしないつもりだけど、やっぱりいわれればちょっと傷つくわ・・・」

「・・・」

「いいの・・・そうかもしれないことは、わかるわ。でも樹にはね・・・ずっとなりたくて、あこがれて人がいるの。その人みたいに、悪から人を守り!その悪さえ許し、更生させる!そんな正義の味方になろうって、子供の時からずっと決めてるの!」

だから、樹が目指す夢を、あなたに言い当てられたことが、とってもうれしかったの・・・だって

そうでしょ?自分の夢を理解してくれる・・・共感してくれる・・・これほどうれしいことが、この世の中にあるのかしら?」

「わかりますその気持ち!」

メチャクチャ共感した。

「・・・・・・・・・・」(私のほうが、樹ちゃんのことずっと前から、ずっと深く理解してるもん。)

「樹は貫き通すわ!どんなに笑われても、傷ついても、理解されなくても・・・・・・・・この夢だけわねニコ)」

(本物だ!彼女の信念は本物だ。)

俺も、夢に関しては誰かに負ける気はないけど。

彼女の意志の強さを、まじかで見ていると圧倒される。

夢という個人個人がちがう、曖昧で大切な物で争うつもりはないけど。

それでも彼女に思いに激しく感化される、心の奥底で負けたくないと思う自分もいた。

「夢のため、お互いがんばりましょう樹さん!」

「ええ祭君!」

お互い手を取り誓い合った。それはまるでアニメやドラマの理想のライバルシーンを描いた、ワンシーンにさえ思わせる。

理想のライバルそれは、たがいに感化し影響し伸ばしあう、人の繋がりでは、強くなるものなのだ。

（これが魔女を目指すってことか・・・）

実際、ライバルという無縁な人生を送ってきた彼には、こういう関係はフィクションであり、現実のこの世界ではないものとか思っていた。だからこそ嬉しかった、ありもしないあこがれた関係がいま築かれたのだから。

「はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい」

いきなり、奇声をあげ藍原さんが、俺達の間割って入った

「わたしもわたしもーめざすー!」

最初の印象では、おとなしく気弱そうな女の子、それが藍原さんへの俺の第一印象だ。

だが顔を赤くして、両手をあげながら奇声に近い声で叫ぶ。彼女を見ていると、俺の最初の印象はどうやら間違いだっただろうだ、訂正しないと。

「私も、樹ちゃんみたいに正義の味方になる。私ね！わたしね！樹ちゃんのためなんでもするの！だから私のことも、頼りにしてね・・樹ちゃん」

「ありがとう凛」

そして藍原さんは、弱よわしくだが、こちらをキツとにらんできた。敵愾心むき出しである。

「あはは（汗）」

（なにか、ちがう意味でのライバルと思われてる感じだな。あなたには負けないぞ！そんな気合いを感じる。）

そんな藍原さんに、凜さんはやさしく。

「こらっ・・・凜・・・やきもち焼かない。」

「ううっ! ? やきもちじゃないよ~~~~うう」

心の内を読まれて恥ずかしいのか、藍原さんは真っ赤になって涙目

になって反応した。

そんな藍原さんを今度は、諭すように凜さんは。

「一番大事な友達はあなたなのよ。」

「はうっ（かあああ）」

「ずっと側にいてくれた。だからこれからもずっと側にいてもらうわ。誰よりもあなたを信頼してる。ずっとずっと二人でがんばろう

（ニコ）」

「うんうんうんうんうーん」

藍原さんはすぐうれしそうだ。

（この二人からは、友人以上の繋がりをを感じる。）

それは、一緒に夢を目指すという、友人同士の語りであったが。

だが藍原凜は、夢を目指すというより、好きな友達の真似をしているだけにすぎないように感じる。

本当に正義の味方になりたいかも不明だ。だがそれも、一つの夢の形であろう。

『大切な誰かの真似をしたい。』

『あこがれる誰かみたいになりたい。』

こういう過程があつてこそ、黒羊祭や神原樹の、今があつたのかも
しれない。

夢の初めは、どんな入り方でもいい、ようはそれを、最終的に自分
の夢として、確固たるモノにできるかどうかだろう。

たとえばできなくても、好きな友人の真似だけだとしても、それをだ
れが非難できようか。

所詮、人は一人で生きられない。誰かを求めています。

『繋がり』

人がそれを得ようとするのは、必然であり欲求であり、義務なのだ。
神原樹は、それはわかつているのだろう。

ただ、無二の親友を、かけがいのない友達を頬笑み、受け入れてい
た。

その友人同士の、ほほへましい繋がりを見て。黒羊祭はいまはいな

い、手紙と電話だけのやり取りの幼馴染のことを思い出した。

1話3

魔女になったら、きつとまた会いにいく。

きつと胸を張って、あの時の約束を守るから。

そう、彼が思い出に浸っている時。

「祭君。」

樹さんが、話かけてきた。

「!・・・はいなんでしょ。」

「残念だけど、あなたは魔女にはなれないわ。」

「ま・・・魔女になれないって・・・どういことですか？」

「ごめんさい、さっきあなたには、魔女になれる資格はあるっていったけど、なれない理由があることを、ド忘れしていたわ。」

「しかたないよ・・・樹ちゃん、男の人がいきなり魔女になりたいなんて、言ってきたんだから・・・魔女になるための、もうひとつの条件をド忘れしていても。」

「もうひとつの条件・・・そ・・・それは、一体なんなんですか？」

樹さんは、申し訳けなさそうに。

「・・・昔はね、この魔女学への入学条件は、魔力を持っていることだけだったの。」

いついかなる時期でも、この塔に入れさえすれば、いつでも入学できたわ・・・でも今は違う。

昔は常に関ければっなしになっていた、この扉も、ここの生徒しか開けられない。

そして、この魔女学で、魔法を教わることでできる者は、1年に1度・・・3月3日、この扉の開放日にこの塔に入れた者だけなのよ。残念だけど今日は、5月10日。ここに入学して、魔女見習いになりたいのなら、来年の3月3日まで、まで待つ必要があるわ。

それから魔女を目指しても遅くないんじゃないかな？」

「・・・でも俺は・・・いますぐ魔女になりたいんです！」

「……………気持ちわかるけど……………」

「やっと……………沖繩から、旅費をためて東京にきたんです！
ここで魔女をあきらめたら、またいつここに来れるかわかりません。
だからオレは、今日いますぐ、この魔女学に入学できるよう、ここ
の学園長に直談判してきます。」

「……………」

樹さんは感心したように。

「すごいわね……………勇気があるわ、さすがだわ祭君。」

「……………そうですか……………」

すこし照れくさい。

「ええ……………あの学園長に直談判だなんて……………」

「あの学園長……………」

「超有名だから知らない訳じゃないでしょ？噂では学園長は、何千
年も生きている不老不死らしいの
え？

「この魔女学は、50年以上前まで大東京タワーといわれる場所だ
ったわ。開かず壊せず、ただ存在するだけの塔だった。その頃から
この中にいたという噂よ学園長。」

「!？」

「魔女学校学園長メフェス ヴアンパイア……………
彼女は、50年前からここで魔法を教えている。」

いまでは先生職は卒業生の生徒にまかせいるけど、それからいまま
ですつとこの塔で、学園長として容姿は一切変わらず存在し続けて
いる。

みんながこぞって噂したわ、学園長は不死ではないかと、この扉が
開く前から、この塔の中にいたんじゃないか？

実はこの塔に封印されている化け物で、人間を墮落させるため、魔
法という禁断の果实をもってきた悪魔じゃないかって、いろいろね」
「……………（ぶるっ）」

「この塔は、人が存在する前からあった、もしかしたらここを作っ

たのも彼女で、ずっとこの塔の中に生き続けているのかもしれない。
・授業は先生だけだし、樹はまだちゃんと一度も見たことはないから、確信はないけど・・・」

「・・・」

「い・・・樹ちゃん!」

「!」

「・・・大丈夫? 祭君?」

「へ?」

「・・・顔が青いわよ・・・?」

樹さんは、心配そうに、顔を覗き込むように見つめてきた。

「もしかしていまの話・・・全然しらなかった?」

俺は慌てて。

「ち・・・違います! 知ってました。これは侍者青いです!」

（武者青いつて何! それをいうなら武者ぶるいだ!）

「ご・・・ごめんなさい知らなかったみたいね。（しょぼーん）」

演技は、バレバレだったらしい。恥ずかしい。

「樹のせいで・・・怖がらせちゃったみたいね（しょぼーん）」

樹さんは、本当に申し訳なさそうだ。

「い・・・いえ・・・へっちゃらです。これから歴史上初の、男が魔女を目指すんですから。」

倒してみせますよ、学園長を!」

「えええ!?!」

「ま・・・祭君! 祭君! 倒しちゃダメよ! ダメよ! 学園長なんだから!（汗）」

「あっ・・・そ・・・そうでした・・・すみません」

情けないことに、かなり動揺してしまっているらしい。

（不老不死・・・化け物・・・そんな相手に直談判・・・）

でも・・・知らないより知っていたほうがいいはず。交渉する上で、相手のことを知らないより、知っていたほうが、断然有利にことを運べるだろう。）

なら、相手が相手だけに、それだけの気概と気合いが必要だろう。
俺はあらためて、自分に渴をいれる。

『渴!』

その心境とは裏腹に、顔はまだ青かった。

「祭君・・・」

「!」

彼女は俺に近づき、震える俺の手をとった。

「樹さん?」

「!・・・樹ちゃん・・・まさか!?」

そして俺の手のひらに、指で人の字を書く、それを。

『ペロ』

「!?!?!?」

(舐めたああああ!?!?)

「お母さんがね・・・よくやってくれたの樹に、こうやって手のひらに人を書いて舐めると、緊張がほぐれるって」

(樹ちゃん!それは自分で舐めるものだから!わたしもやられて、嬉しかったけど!)

俺は。

(女の子に初めて、手のひらを舐めれた・・・)

あまりの衝撃に、さきほどの恐怖はすべて吹き飛んでいた。

「いいいいいいっ・・・樹ちゃん!汚いよ!舐めたら!」

「あっそうね!ご・・・ごめんなさい!祭君・・・いきなり手を舐めてしまっ、汚かったでしょ?」

「そ・・・そうじゃないよ」

藍原さんは、慌てて急いで、樹に自分のハンカチを差し出した。

「ありがとう凜」

それを。

「はい、コレを使って祭君」

俺に渡した。

「！そっちじゃないよ！樹ちゃん！」

「え？」

「あ・・・あの、いいですから・・・気にしてませんから」

「そう・・・ごめなさい。あなたが・・・死んだ母に似ていたから、ついで」

（容姿だろうか？それとも雰囲気？）

「いえ・・・俺、勇気出ました。頑張ります」

今度は、心の底からそう言えた。

「よかった」

「樹ちゃん！」

「ん？何？」

「そろそろ時間だよ・・・授業遅刻しちゃう」

「あ・・・そうね・・・もうこんな時間！」

樹さんは、時間を携帯で確認した。

「ごめんさい祭君、こんな所で長々と立ち話して」

「いえ」

「じゃあ樹達はいくわね、扉は開けておくから、がんばってね」

「はい！」

そう言うのと樹さんは、閉じた扉の前にいくと、スッと手を、やさしく触れた。

すると、300メートルはある、開かずの扉は、音もなく容易に開いた。

その静けさに、まるでいままでずっと開いていたかのような、雰囲気さえ感じた。

「樹さん？あの・・・扉はどうすれば閉まるんですか？」

「ん・・・2、3分もすれば勝手に閉まるわ」

「そうですか。ありがとうございます。」

「また会いましょう祭君・・・教室で」

「はい樹さん」

樹さんも、このことは言っていなかった。たぶん知らなかったんだろ
う。知っていたらきっと、彼女の性格なら、絶対教えていたはず！
「くそっ！こんな所で引けるか！」

（今日ここに入るって決めたんだ・・・あきらめるか！逃げてたま
るか！こんな所で、後ろを振り返る余裕なんて、いまの俺にはない
！前につき進め！歩みを止めるな！このまま学園長室まで突っむ！
！）

彼は、ゴーレムに群れに追われながら、塔の中に男子初の侵入をと
げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265ba/>

魔女と僕と魔女

2012年1月11日16時45分発行